

## 平成24年度3学期終業式式辞

本日で3学期が終わり、平成24年度が終了します。3月1日には3年生が65回卒業生として本校を巣立って行きました。大学入試の結果もほぼ出揃いました。65回生は国公立大学前期、後期試験においても健闘し、素晴らしい結果を残してくれました。センター試験とその後の頑張りはずが虎高生と言えるものでした。皆さんは4月から新たな学年となりますが、この1年を振り返り次の学年への心構えをしっかり持ってほしいと思います。

さて、今日の式辞は私にとって最後のものとなりました。何について話そうかと考えましたが、結局、「ことば」に落ち着きました。私たちは毎日の生活の中で、他人のことばによってとても勇気づけられたり、感動したり、幸せな気持ちになったり、逆にがっかりしたり、嫌な気持ちになったりしています。ことばが人に与える影響はとても大きいものです。朝、「おはよう」と挨拶されて、それも笑顔付きならとびきり嬉しいし、反対に、こちらから「おはよう」と声をかけても、何の返事もなく通り過ぎてしまわれたらがっかりします。

皆さんが嬉しいとか幸せだと感じる時はどんな時ですか。例えば自分が相手にしてあげたことで「ありがとう」と感謝された時、自分の良さを褒められた時、自分のしたことを評価された時には、きっと嬉しくて、元気が出て、さあ頑張ろうという気持ちになるはずです。逆に落ち込んだり、情けなくなったり、嫌な気持ちになるのは、他人に気持ちが分かってもらえなかった時、きつく叱られた時やプライドとか人格を傷つけられることばを浴びせられた時ではないでしょうか。ことばによって人は元気にもなれば落ち込んだりします。

「ことば」の話から少し飛躍してみます。人は他人から支持され、勇気づけられることでやる気が出てきます。「ことば」も一つの贈り物だと考え、「贈与経済」というユニークな考えを唱えている人がいます。内田樹さんという人です。思想家であり武道家でもあります。「贈与経済」とは、自分のところに来たものはそのまましまっておかないで、誰かに「パス」というものです。お金でも商品でも、情報、知識、技術でも、そしてもちろん「ことば」でも何でも自分のところに止めておかないで次の人に回さないといけない。いいものは人の間をぐるぐる回していくべきだということです。

「情けは人のためならず」という諺があります。人に親切にすれば巡り巡って自分に恩恵がもたらされると意味です。内田さんは様々な問題を抱えた今の社会を眺め、私たちのこれからの生き方について次のような提言をしています。「私たちの意識を批判することから提言することへ、壊すことから創り出すことへ、排除することから受け容れることへ、傷つけることから癒すことへ、社会全体で、力を合わせて、ゆっくりと、しかし後戻りすることなくシフトしていくべき時期が来たと思っている」と。

今は社会における人間関係が昔とは大きく変化しています。人間同士が孤立しないで、共に助け合い、共に生きていく社会にしていくことが強く求められています。勇気づけられることばをもらったら、それを「贈り物」と考えて、そのお礼としてすばやく次の人にその人を勇気づけることばを贈る。人から親切にされたら、なるべく間をおかないで今度は別の人に親切をパスする。このような温かな贈り物のパス・サイクルがぐるぐる回れば、私たちの社会はきっと思いやりと安心に満ちたものとなるはずです。

虎姫高校のすべての皆さんが仲間を敬い、嬉しい気持ちにさせることばを贈る。そして贈られた人が次々とパスしていく。ことばだけでなく手助け、知識、能力、ユーモアなどを贈り、もらった人がどんどんパスしていけば学校の居心地はもっともっと良くなるだろうと思います。決して人に嫌な気持ちにさせたり、傷つけたりすることばや行いを贈り、パスしてはならないのです。「ことば」は大切に、美しく使うべきものだからです。

4月から新しい年度が始まります。皆さんの益々の活躍を祈念し、式辞といたします。

平成25年3月22日  
滋賀県立虎姫高等学校長 西嶋博純

